

国語科教育
における

定期考査の一つの位置づけ

米 川 忠 臣

一、はじめに

『三訂国語科教育法概論』（大学国語教育研究会編）によると、学習評価の目的は、

(1)、学習の目標に向かつての指導の資料を得るため。（主として指導者に役立つ。）

(2)、学習の始めにおいて、学習者の実態を知るため。（学習者の知識・態度・技能・興味・関心などについて）

(3)、学習者個人および学級の困難点を診断するため。

(4)、学習の成果を測定するため。

(5)、指導計画と指導法の反省のため。

とある。しかるに、商業高校の国語の教師（執筆時）としての私の日常を振り返ってみると、学習評価は「成果を測定するため」（悪く言えば、点数をつけるため）に流れていた。また生徒の日常は、「勉強の仕方がわからない」という理由で国語の学習を軽視する傾

向にあったという問題を抱えていた。何を教え、どのような力をつけ、いかに評価し、どうして展望を与えるかという混乱を続ける日の中から、生徒にとって医者のような存在、生徒の国語の誤りを直す医者に、国語の教師はなれないのかと考えた。この視点から、暗中模索の手さぐりの試みを行なったのが、生徒個々の学力診断と学習の方法の発見をめざす定期考査の利用の試みである。以下は、未だ理論化に遠い一実践の中間報告としてお受け取りいただきたい。

二、定期考査を利用した学力診断とその発展

〔I〕経過と方法

昭52・4 新入生対象に東京都高等学校国語研究会作成の「国語標準学力テスト」を実施する。

昭53・5 一年生を対象に、中間考査の正答を分類させ、得点を座標化し三角形を作らせる。データ不足のため効果少なし。

学力・学習状況診断票

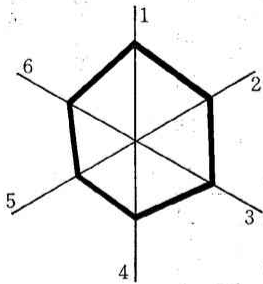
(昭和54年1学期中間考査)

- | | | | |
|-----------------------------------|--|-----------------------------|----------------|
| 1. 漢字・語句の勉強
ができているか | <ul style="list-style-type: none"> 書取、漢字の読み 意味、用法 | (一)、(二)
(三) | (20点)
(10点) |
| 2. 表現力と教科書を
すみずみまで理解し
ているか | <ul style="list-style-type: none"> 基礎的な表現技術 教科書の教養的勉強の姿勢 | 四
五の(1)
六の(2)、(一)の(5) | (8点)
(6点) |
| 3. 文脈の流れが理解
でき、教科書を熟読
しているか | <ul style="list-style-type: none"> 文脈と熟読 | 五の(2)、
六の(1) | (16点) |
| 4. 指示語がわかるか | <ul style="list-style-type: none"> 指示内容 | 五の(3) | (15点) |
| 5. 内容説明と授業中
熱心に聞いているか | <ul style="list-style-type: none"> 内容説明
解釈 | 五の(4)
六の(3)、(4)、(5) | (27点) |

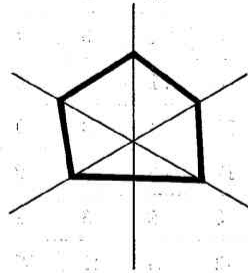
	項 目	満 点	得 点	正答率(%)	備 考
1	漢字・語句	30			
2	表 現 力	14			
3	文 脈	16			
4	指 示 語	15			
5	内 容 説 明	27			
6	合 計	100			

診断図

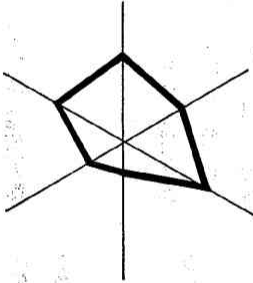
I 類型 (六角)



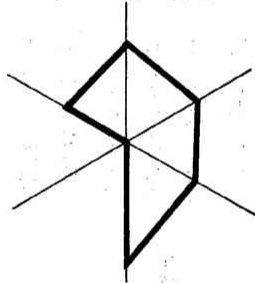
II 類型 (五角形)



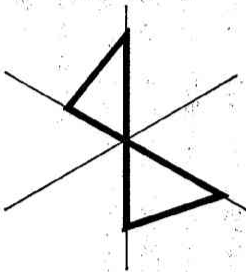
III 類型 (砲弾)



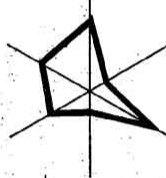
IV 類型 (ブーメラン)

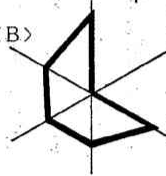


V 類型 (蝶々)

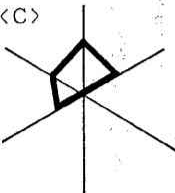


特異型
<A>

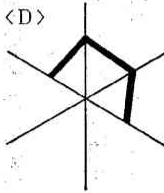




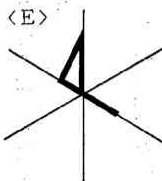
<C>



<D>



<E>



昭 54・5 二年生を対象に53年と同様の方法で六角形を作成させる(後述)。
昭 54・7 前回と同様。

実施した学力診断(54・5)は、総合的な基礎学力調査のような

本格的なものではなく、単元、ジャンル、その他の制約を受けながら、授業の進度にあわせて作成した中間考查の問題を利用したものである。答案返却時に学力・学習状況診断票(前ページ掲載)と六角座標図二種を生徒に配布し、正答を五つに類別させ(類別は適当

に決定)、合計点とあわせて六角形を作成させた同じ図を二つ作成させ、私と生徒が夫々保管することにした。(調査問題は紙面の都合で割愛する)

〔Ⅱ〕 診断票の分析

＜類型分布表＞

＼	1組	2	3	4	5	6	計
I	8	7	12	8	6	10	51
Ⅱ	2	4	6	3	4	7	26
Ⅲ	11	6	11	6	6	12	52
Ⅳ	8	11	4	13	10	9	55
V	7	11	3	10	9	4	44
他	3	3	2	3	2	0	13
計	39	42	38	43	37	42	241
平均点	48.1	46.9	51.3	47.1	47.2	49.6	／

とにより、個々の生徒に対して一つの学習の展望を示すことが可能

生徒の得点状況を示す診断図は、五つの類型と特異型に大別することができた。類型の()内の名称は指導上の便宜のため適当につけたものである。この診断図に基づいて、各類型の特徴と今後の努力すべき要点について次のように概括し、これを生徒に与えるこ

となったのである。

△類型別概評▽

I 類型……最も正常な型。

今後従来の学習方法を継続すること。六角形を大きくする(高得点)ためには学習の量を増加すること。

Ⅱ 類型……指示語が理解できない型。指示語の解答方法が未熟であるとともに、指示内容の把握が曖昧である。

辞書を引き、授業中熱心にノートを取り、かなり努力するが学習の範囲が教科書に限られる傾向がある。また情緒的に国語をとらえていて正確さに欠ける。

今後論説文を多く読み、つなぎのことはや指示語に注意して論理展開を追う学習に心がけること。

Ⅲ 類型……指示語・内容説明の弱い型。

一定の努力を積み授業にも参加しているが、学習方法は受身で、生活意欲においても主体性の確立に弱さが見られる。

指示語についてはⅡ類型と同じ学習方法を取り、内容説明は次のⅦ類型と同じ方法をとること。それとともに、自己の興味・関心を大切にし、それを伸ばすように努力すること。

例えば、趣味に自分のすべてを打ち込み、その過程で生じる体験を作文にして提出すること。

Ⅵ 類型……内容説明・解釈の弱い型。

文章を深く正確に読むことができないこと、自分の思考をまとめる力に弱さがある。

作者の思考の把握、表現・内容の説明等の解答方法を身につけ、情緒ではなく作業としての国語の学習方法を身につけること。これを基礎にして多くの本に読み慣れ、自分の頭で考える訓練をする。そして思考を表現する練習を積む。例えば、読んだこと、見たこと、考えたこと、感動したことを書きまとめる心がけを持つこと。

V類型…基礎的な表現力、内容説明の弱さと教科書の学習不足のめだつ型。

現代国語の学習を軽視し、ノートの整理もせず授業にも参加しない傾向の生徒である。

国語に興味と関心を持つこと。例えば道を歩いていても看板の文字を読み広告を見て、意味の不明なことば、文字の誤りをさがすこと。辞書をいつも横に置き、新聞のスポーツ欄や漫画の本を読む時でも、意味のわからない語は辞書を引くことから出発する。その心構え(『日常生活即国語の学習』)を持って手あたりしだい多くのものを読むこと。また授業に熱心に参加すること。

特異型、(A)はII類型の変型

(B)はI類型の変型

(C)、(D)、(E)は、家庭環境、性格等に複雑な事情があり、生活そのものの基盤が揺れている。

さて、どの力が学力に差をつけているのかということは、各類型と学級平均点との関係を類型分布表を見れば判然とする。即ちV類型(蝶々)である。V類型の多いクラスは平均点も低いことが明らかになっている。

〔Ⅲ〕診断票に基づくとりくみ

この結果を五月に得て、七月の定期考査に向けて次の四点についてとりくんだ。

- (1)、次回考査にむけて、教材の選択と大まかな指導計画の作成。
- (2)、学級全体での説明。〔Ⅱ〕項で述べた概評と五類型別の傾向、努力点、対策を説明する。

- (3)、個別面談を行なう。成績不振者(50点未満と蝶々型)に診断票で学習の方向を指示する。

- (4)、毎時、授業の目標を明示し、各類型との関連を説明する。

その結果、七月の考査においては、蝶々型の減少と六角形型の増加が見られるとともに、外枠の広がり(平均点の向上につながる)があった。但し、これは生徒にとって出題形式がわかっていて対策を立てやすかったのではないかという懸念も残っている。

以上の些細な経験の中から、診断票の利点をあげるならば、

(1)、生徒に自己の学習状況と目標を具体的に理解させることができる。

(2)、指導に一貫性が生まれ、問題作成や毎時の発問にも方向性を持つことができる。

(3)、診断票作成は答案がえしの時に生徒に作業させることにより、学習への意欲づけをすることができる。

と言える。ただこの診断票は、ジャンルにより項目を変えねばならない不便さがあるが、国語の全領域についてこのような診断をするならば、生徒の三年間において、教師の医者としての位置が確立されるのではないだろうかと考えている。

三、考查問題作成のために

〔Ⅰ〕 国語の力——授業でつける力とは？

国語科担当の教師にとって、最も基本的な命題であり、教壇に立った最初の日から既に血肉として持っていなければならないはずの課題である。しかるに私の場合は、未だに曖昧模糊としており四苦八苦している命題である。今は総合的に述べる事が出来ないため、読解に焦点を絞り、二、三の研究者の説を参考にしたい。

『高等学校学習指導要領』（53年8月）の「国語Ⅰ」を見ると、「理解」は、「ア、話や文章の主題や要旨を叙述に即して的確にとらえること。」をはじめとして、主題、要旨、構成、内容、情景、

心情、見方・感じ方、表現上の特色、文体の特徴等々が列記され、学習の項目は理解できるようになっている。『国文学、解釈と鑑賞』（昭46・10臨時増刊号）には、本間丸平氏が「読む能力の個人差と能力別指導」の論において、「読む能力」を次のように分析しておられる。

1 理解力

(1) 文脈の中で語いを理解する力

(2) 文脈を読みとる力

(3) 論点・要点を把握する力

2 洞察力

(1) 表現の裏の意味を読みとる力

(2) 要旨・論旨を読みとる力

3 鑑賞力

(1) すぐれた表現を読み味わう力

4 表現力

(1) 正しく朗読する力

5 読む技術

(1) 速く、確かに読む力

6 読む態度

(1) 批判的、主体的に読む力

(2) 読んで感想・意見をもつ力

簡潔で明瞭な提示であると考える。また、『読解・読書指導事典』

(第一法規出版)において、養手重則氏が読解の基礎能力を分析して平易に示されている。

△読むことの基礎能力の分析表▽

(1)言語要素

- ・音読や黙読や朗読をする。
- ・文字を読む。
- ・語句を読む。
- ・文法に即して読む。

(2)要素能力

- ・目的や形態に応じて読む。
- ・適書を選んで読む。
- ・辞書や参考書などを利用する。
- ・叙述に即して内容を読みとる。
- ・あらましやあらすじを読みとる。
- ・構成や構想を読みとる。
- ・要点や要件を読みとる。
- ・事実と感想や意見とを区別して読む。
- ・人物の行動や心情や性格を読みとる。
- ・場面の情景を読みとる。
- ・要旨やすじを読みとる。
- ・意図や主題を読みとる。

・書き手の物の見方や考え方を読みとる。

・内容や表現を鑑賞する。

・内容や表現を批評する。

他に滑川道夫氏の「読書力の分析」(『読解、読書指導事典』)

や、平井昌夫氏の「読解力の16の基礎能力」(『国語教育の指導計画と評価』)などの分析が参考になった。更に、教師にとって大変便利なものと思われる読解技能の分析と形態別の適用表を、興水実氏が「国語スキルのプログラム学習」(二一〇頁)で示されている。

これらの有効な理論を参考にして、さて自分の日常的方法をどのように確立するかという課題が残されるのである。考查問題に基本的事項をどのように取り入れ、国語の力をどうしてつけるのか、診断票から蝶々型を追放するためにどのような授業の工夫をするのか、等々の課題である。これらの解明を求めてまず小学校の教科書を調査することにした。

【II】小学校の教科書より

1、童話・物語教材に見られる学習内容

右の表は、教育出版の55年度用「小学国語」一年上／六年下までを調査したもの的一部分である。表において「学習の方向」「設問」は教科書から抜き出したものであり、「考察」は私の感想である。他に日本書籍の「小学国語」、東京書籍の「新しい国語」、光村図

学 年	教 材	目 標・学 習 の 方 向	設 問 (てびき)	考	女
2年 (上)	赤いろうそく (どうわ)	つきは、このお話のどんなところのようすでしょうか。そのときどうぶつたちはどうすやうか。かんがえましょう。	(1) おし合い、べし合いして赤いろうそくをのぞきました。 (2) みんなはおどろいてしりごみしました。	部分的な場合、情景をイメージさせることから始まる。	
4年 (上)	友子とモエちゃん (物語)	次の時のモエちゃんの様子とモエちゃんに対する友子の気持ちを書いてうかがいながら読みましょう。	(1) 友子のうしろにかわれることになった時。 (2) はにゅうびんのちくびにすいた時。 (3) 友子が1年生になった時。 (4) 友子が2年生になったところ。	人々の気持や気持の動き、場面、うつつりかわりを流れとしてとらえさせようとしてよい。3年(上)よりやや高度になっている。	
4年 (下)	こんきつね (物語)	人物の行動と気持ちについて考えながら読み、感想をまとめてよう。	(1) どんはどんなきつねだったか。 (2) 兵十はどんなきつねの気持ちだったか。 (3) どのように変わつたか。それでどんはどんなことをしたか。 (4) 兵十はどんにたいしてどんな気持ちを持っていたか。 (5) 最後の場面。どんと兵十はそれぞれどんな気持ちだったか。	(1)、(2)は本文中の何か所にもなっている。 (3)、(4)は本文からぬき出すだけでは答えられないような、かなりよく考えねばならない設問である。	
5年 (上)	大造じいさん (物語)	人物の気持ちや場面の様子を味わいながら読み、感想をまとめてよ次の時の浅雪に対する大造じいさんの気持ちを考えましょう。	(1) つりばりの糸がみな、びいんと引きのばされた時。 (2) がんの群れが、急角度に方向を変え、西側のはしに着陸した時。 (3) 側の残雪をねらったじゅうを、再びおろしてしまつた時。 (4) 残雪が飛び去っていくのを、いつまでも見守つていた時。	解答が本文中になく、「味わう」という高度な問題である。	
6年 (下)	きつねの窓 (物語)	表現の美しさを味わいながら、人物の気持ちや場面の情景を読み取ろう。	(1) きつねや「ばく」が指で作つた窓には、どんなものが映つたでしょうか。映つたものをノートに書き出し、なぞよう。 (2) 子ぎつねに對する「ばく」の気持ち。どう移り変わる場面。ノートに書きましよう。 (3) うとうと物語るの仕方。書きましよう。 (4) うとうと物語るの仕方。書きましよう。 (5) この物語に出てくる人物の関係を、おもしろく、青い色で書きましよう。 (6) この物語に出てくる人物の関係を、おもしろく、青い色で書きましよう。	物語の読解作業の過程が、6年間のまとめのような形で設定されている。	

書の「小学校国語」いずれも55年度用を見たが、総じて考え方・学習のパターンはほぼ一定であった。学習の内容は、部分的な場面・情景・心情の自由なイメージづくりから始まり、4年生あたりで本格的な文学教材の読解に取り組んでいくようになる。そして5年生では、味わう、主題、表現等々の学習に入り、読解の全過程とも思われるものを終了している。

5、6年生用教材は、高校においても使用できそうな教材と学習過程が含まれており、文学教材の読解に弱い高校生の治療には、このあたりが出発点となると考えられる。

2、説明文、記録文に見られる学習内容

下の表も、教育出版の「小学国語」より抜き出し感想を付け加え

学年	教材	学習の内容(てびき)	考察
2年(上)	ひなの話	つばめとひよこのそだちかたに気をつけてよみましょう。 (1) 日にちをあらわすことばに気をつけて、ひなのそだちかたをよみとりましょう。 (1) 「おやどりは……ます」という文の形に気をつけて、おやどりのせわのしかたをよみとりましょう。	事実(記載内容)を把握することを中心にし、いつ、どこで……という5Wがとり入れられている。また、文形の視点がすでに用いられている。
4年(下)	おもちゃのひみつ	・ 次の言葉はだんらくの初めに使われています。どんなはたらきをしているか、前のだんらくとの続きぐあいを考えましょう。 1) ところが、2) では、3) このよう。 ・ 次のことに気をつけて読みましょう。 1) おもちゃのどんなひみつについてせつめいしようとしているか。 2) どんな順じよで調べていったか。 3) そのときにわかったことは何か。	3年(上)のつなぎ言葉が、その働きを知るとして出されている。また、説明文全体の流れの理解が求められ、すでに部分的な問題を超えてきている。
5年(下)	スポーツのルール	文章全体の組み立てを理解し、要旨について考えてみよう。 1) それぞれのスポーツのどんなルールが、どんな理由で考え出されたり、変えられたりしたかを語り取りましょう。 2) 筆者のルールに対する考え方をまとめてみましょう。 3) スポーツのルールについて、自分が今まで思ったり考えたりしていたことと、筆者がこの文章でいっていることと、同じところ、ちがうところを話し合ってみましょう。	内容の正確な理解と要約。 筆者の考えとそれに対する自己の意見と設問があり、すでに説明文のまとめ的な学習となっている。
6年(上)	美を求める心	考えの述べ方に気をつけて、文章を読んだり書いたりしよう。 1) 段落ごとに筆者の考えがいちばんよく出ていると思う文を一つか二つ選びノートに書き出す。 2) 筆者は美を感じ取るためには、どのように物を見ることが大事だと言っているかをまとめる。	キ・センテスの抜き出しと論理の展開に注意させている。

たものである。全体として物語教材よりは簡潔な学習パターンであり、内容の正確な読みとりを主としている。しかし方法は多様で論理性追及の視点が重要性を占めている。3年生までは、内容を正確に理解することに力点がおかれ、5W、比較、図表等々の方法のとり入れと、文形、つながりの言葉、指示語的な文頭の語等々の技術的作業が指導されている。5年生で全過程（論説文読解の諸作業）を通過し批判にまで至る。

5年生の読解過程が作業学習（いくつかのポイントに基づいて作業することにより読解できないかと考えている）として仕上げることででき、高校一年の教材ができない生徒に対して、小・中学校の教材を配列することによりその能力を高めることができるのではないだろうかと考える。

3、言語事項に見られる学習内容

言語事項は比較的整然としており、高校生を対象にするならば、教材の配列の工夫により、ドリル学習によって相当程度まで学力をつけることは可能であろう。教育出版社の「小学国語」より二、三の例を抜き出してみよう。

(a)、短文をつくる

- ・ まるで～のように（一・下）
- ・ ～は……のようだ（二・上）
- ・ ひっそり、うっとり（三・上）

・ よちよち、もくもく（四・上）

・ 首つ引き、とほうにくれる、自分をとりもどす（五・下）

（六・上）

右の5年・下あたりの言葉は、高校生を対象にしても平易すぎることはなく、6年・上になればやゝ高度である。

(b)、言葉の意味と使い方

・ こしをぬかす（二・下）

・ まゆをよせる、目をまるくする（三・下）

・ 口をへの字に結ぶ、ひざを乗り出す（四・下）

・ 気を張る、快い羽音一番（五・上）

・ 待ちかねる、耳ざとい（六・下）

これらは「次の言葉の意味を考えましょう」として学習の課題になっているものである。高校用教材は言葉が難解になり、読解の障害となる場合が時々あるが、この5、6年生の言葉にしてもなかなかのものである。因みに「ことば」について1年生用の教科書の調査結果をあげてみよう。

東京書籍の「あたらしいことくご1下」の巻末には「ことばのまとめ」が掲載されている。はな、あたま、ボール、森、にがい、しずかに、入れる、みのもる等々ごく基本となる語がまとめられているが、実際教科書に使用されている語はこれ以上の高度なものであつ

だ。教育出版、日本書籍、東京書籍、光村図書の1年上、下に使用されている語は、

あまやどり、うすぐらい、大ぶり（降り）、おもわず、かくご、かなわない、くちぐちに、ぐしゅぬれに、こうばしい、さすがに、しんあいなる、すみわたる、そなえる（供）、たちまち、ちらつかせる、（どんな）つくり、つまり、とてつもなく、くながらも、ふくむ、耳をすます、めがける、もぎとる、ようやく

等々である。子ども達は1年生ですでにこのような「ことば」を通過しているのである。

このような調査を続け、指導に必要なことばの段階を設定すれば、調査問題作成や作文指導等に有効な資料となるであろう。また願望としては、教育基本語彙のようなものを国語研究所あたりで早速に設定してもらいたいものである。

(c)、言葉の係り受け

これは教材を多く集めることにより、最もドリル学習のしやすい分野である、例えば、

- ・ 次の文の言葉の係り受けを図に表してみよう。（3・下）
- (1)、まっ黒なけむりが、もくもくと立ち上っています。
- (2)、きりのような雨が、校庭にしとしととふり始めた。
- ・ 次の——線の言葉には、どんな言葉が係っているでしょう。

(4・上)
琵琶湖の北東に、三島池とよばれる、周り一キロメートルほどの池があります。

- ・ 次の文の（ ）の中に、言葉の役わりを考え「どんな・何かに・どこに・どれほど・どうする」を、それぞれ入れましょう。

赤や黄色の（ ）花が（ ）花だんに（ ）いっぱい（ ）さいている。

- ・ 次の文の主語と述語を調べましょう。（6・上）

こうした島々と、それらをとり巻く海が、これからわたしが貝の生態を観察する場所になるわけです。

と、このように配列すれば、文の構成を理解する訓練を積ませることができるのである。

さてこれら以外に接続詞や、こそあど言葉や、熟語の組み立てなど、また、漢字の由来・部首、外来語、敬語法、句読点等々について、更には、学習の到達目標についても触れなければならないのであるが、紙面の都合と調査不十分のため今後の課題として別の機会に考えて行きたい。

以上のように、教科書を任意に調べてきたが、全般に小学校の段階ですでに基本的な方法や技術・語彙等を習得することになってい

るのには、少々驚きであった。それとともに、高校生の学力の弱点を克服する出発点は、小学校の教材と学習方法にあることを痛感したのである。

私のこの感慨は、教科書の編集に携る先生方や、小・中学校の実践家にとって笑止なことであり、この一文が遼東の冢の如きものであろうと予測しながらも、日常の混迷の中で常に切望していることは、この一文を遙かに発展させた「一覧表」の出現である。設問したい事柄を学習過程の中で位置づけ、学習の段階と過程を明示したような事典、言わば、「基礎学力調査問題作成事典」のようなもの

の出現である。

この事典を利用していただくことにより私は二つのことが実践できると考えている。一つは、系統的に作業としての国語学習ができること。もう一つは、自覚症状もなく全快したいとも思っていない生徒の病気を洗い出し、医者としての処方箋の書き方を身につけることができることである。そしてこれが、私の考えている定期考查の位置なのである。

(奈良県立高田高等学校教諭)

受贈雑誌目録 (一)

(55年5月～56年8月)

国語国文学報、36・37号(愛知教育大学)
愛知淑徳大学国語国文、3・4号
国文学科報、8号(跡見学園女子大学)
王朝文学史稿、7・8号(国学院大学)
国語の研究、11号(大分大学)
文学史研究、20・21号(大阪市立大学)
人文研究、31巻9(大阪市立大学)
国語と教育、9号(大阪教育大学)
学大国文、24号(大阪教育大学)
語文、37・38号(大阪大学文学部)

大谷女子大国文、10・11号(大谷女子大学)
大妻国文、12号(大妻女子大学)
大妻女子大学文学部紀要、13号
岡大国文論稿、8号(岡山大学法文学部)
帯広大谷短期大学紀要、17・18号
国語国文論集、10号(学習院女子短期大学)
国語国文学会誌、23・24号(学習院大学)
人文、4号(鹿児島県立短期大学)
文学論稿、27号(九州大学教養部)
国文学会誌、15・16号(京都教育大学)
金城学院大学論集、84号
金城国文、57号(金城学院大学)

紀要、1号(群馬県立女子大学)
国文学研究、1号(群馬県立女子大学)
学術研究報告、28号(高知大学人文学部)
甲南国文、27号(甲南女子大学)
紀要、36号(甲南大学文学部)
地域文化研究、4号(甲南大学文学部)
文学研究科論集、8号(国学院大学文学部)
紀要、6・7号(国文学研究資料館)
国文学研究資料館報告、7・8号
駒沢国文、17・18号(駒沢大学文学部)
駒沢短大国文、10・11号